

高度に発達した医学は魔法と区別がつかない

第一話

● モノローグ

人口 1,000 人当たりの医師数 5.4 人。
これは OECD 加盟国で最も人口あたり医師数の多い
オーストラリアのデータである。

一方、日本はその半数にも満たぬ、人口 1,000 人当
たり 2.4 人に過ぎない。

これは OECD 加盟国の中で下から 8 番目と決して多
い数ではない。

ましてや国内で最も人口あたり医師数の少ない岩手
県では、この数字は 1.7 人まで減少する。

山岸はうつむき加瀬に奥沢へと舌撻する。

山岸「実は僕のせいなんだ……」

奥沢「……どういうことだ？」

山岸「本当は僕が異動のはずだつたんだ。ただそれを知った天海くんが

「……」

奥沢「……まさかあいつ、お前の子供の件を知つて……」

山岸は小さく一つ音を喉に詰る。

奥沢「あいつらしいといえば、らしいが……まったく」

ため息を吐き出した奥沢は、呪された天海のビールジョブキに手を伸ばす。

奥沢「しかし看を入れた状態で診療に向かうなよな」

山岸「あ、いや、それノンアルコールだよ」

天海の呪つていたビールに口をつけ、舌打ちする奥沢。

奥沢「……ちつ、確かにそうみたいだ」

山岸「天海くん、音はお酒が好きだつたけど今は殆ど飲まないみたい。自分の患者に向かあつた時、後悔したくないからつて」

奥沢「……まつたく本当に音から不適感なんだよ、あいつは」

病院にたどり着き、白衣に着替え白衣を脱ぎながら内視鏡室へと足を踏み入れる天海。

天海「止血薬を始めます。EVLの準備を」

●古都大学附属病院 脳血管疾患診療部

小さな子供が診療席に腰掛けておりその背後には若い母親。

天海はモニター上にある骨のレントゲンを用意しながら説明を行う。

天海「遭伝子検査の結果、PHEXという遭伝子に変異がありました」

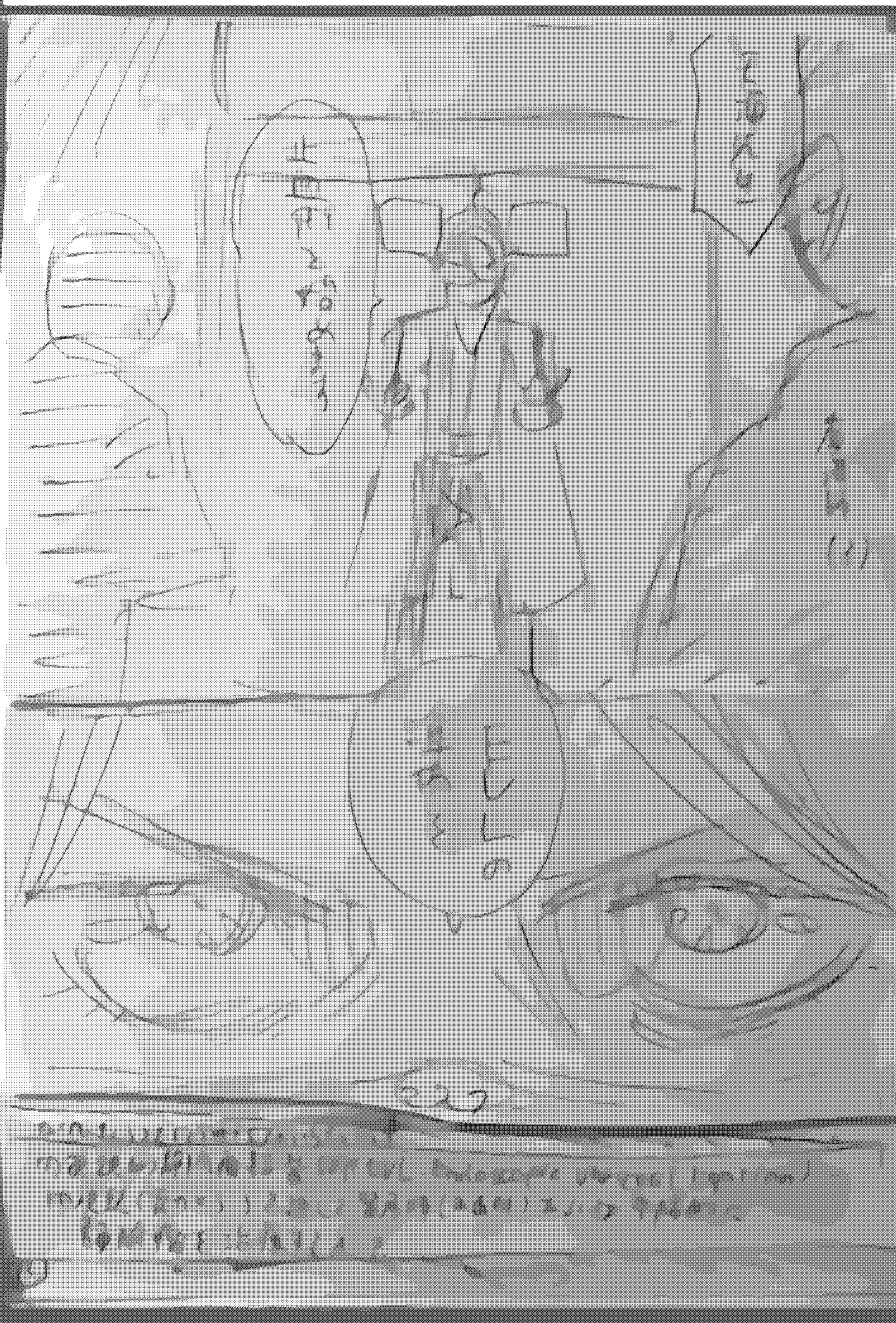
その後、目の前の患者である女の子と顔面へと向き直る。

天海「診断は低リン血症性くる病。でもお薬を飲んで、良くなつて書いています。まずは一安心ですね」

そう口にすると、天海はたどりついで天海を少女へ向ける。

寅曾、女の子は天海に抱きつく。

女の子「おじちゃん。ありがとう」



EVL(Endoscopic variceal ligation)…内視鏡(胃カメラ)を通して留置痔(出血痔)あるいは予防的に食道瘤を治療する方法

いつの間にか島民たちはいなくなり、完全な闇夜となっている。

地面に横たわっていた天海はゆっくり体を起こすと、片手で頭を抑えながら冷感庫からスポーツドリンクを取り出す。

天海「はあ……気持ち悪い……やっぱり船酔いにアルコールが関くなくてエビデンス、何處にも無いはずだよ」
明らかに顔色を悪くしたまま、傍にあつた奴隸バッグに這い寄る。そしてプリンベラン（吐き気留め）をスポーツドリンクで飲もうとする。
しかし次の瞬間、落雷が落ち視界が真っ白となる。

●●●

光が消え診療所の中は食べ物や寝いの品が散乱している。

いつの間にか診療所は、次の瞬間に壁の中へと転移している。
しかし建物の中に天海は居ない。

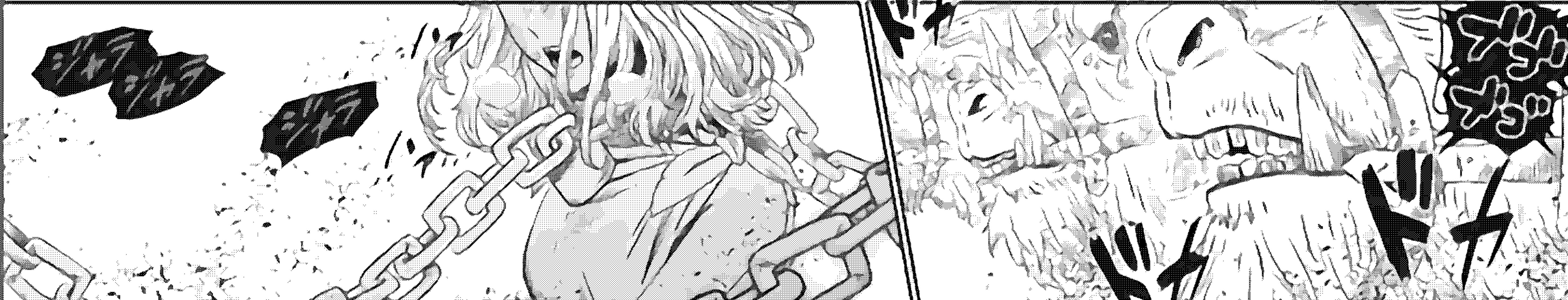
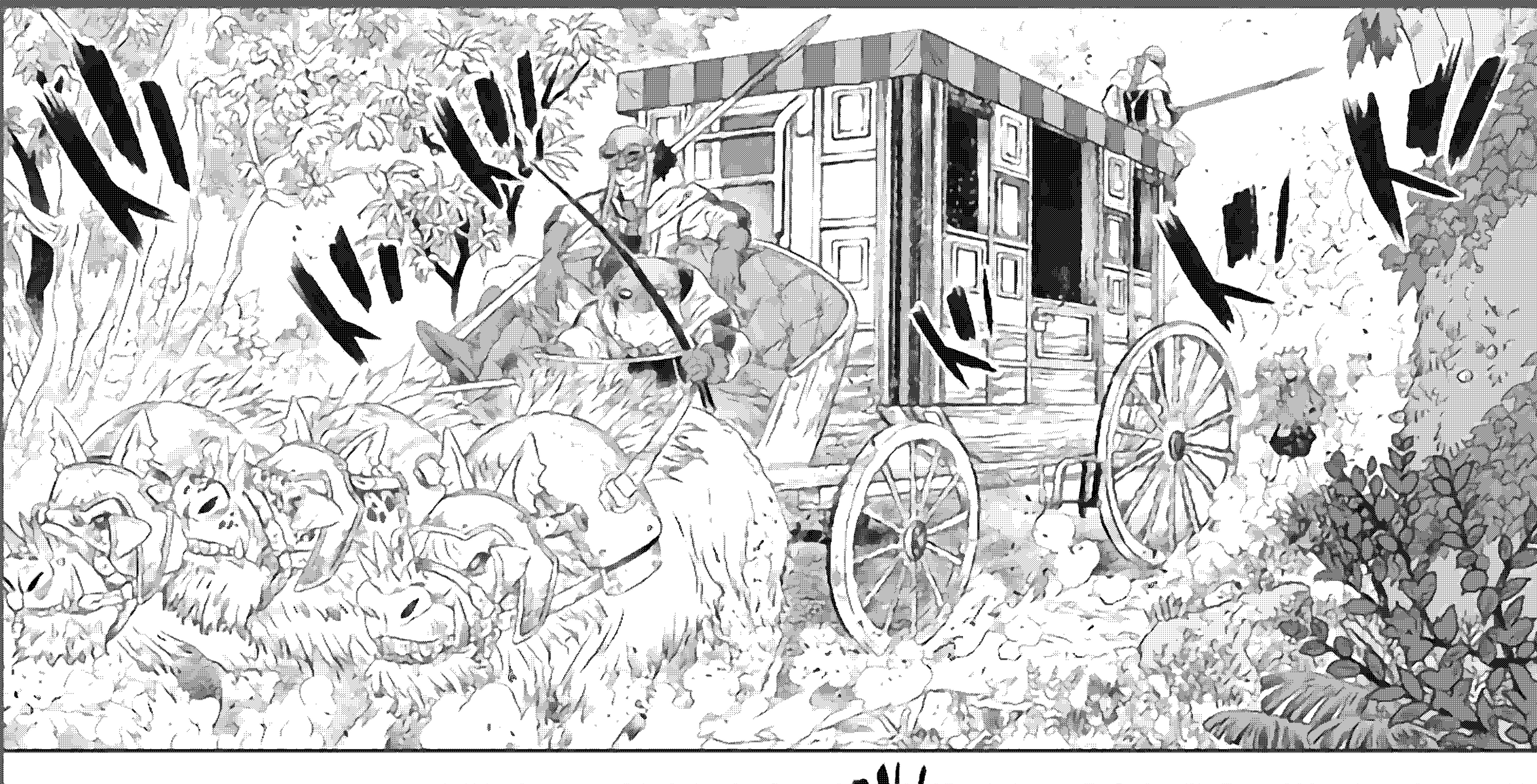
●死の壁の邊（奴隸商人）

壁の中、奴隸商人が馬車に乗り邊を行く。

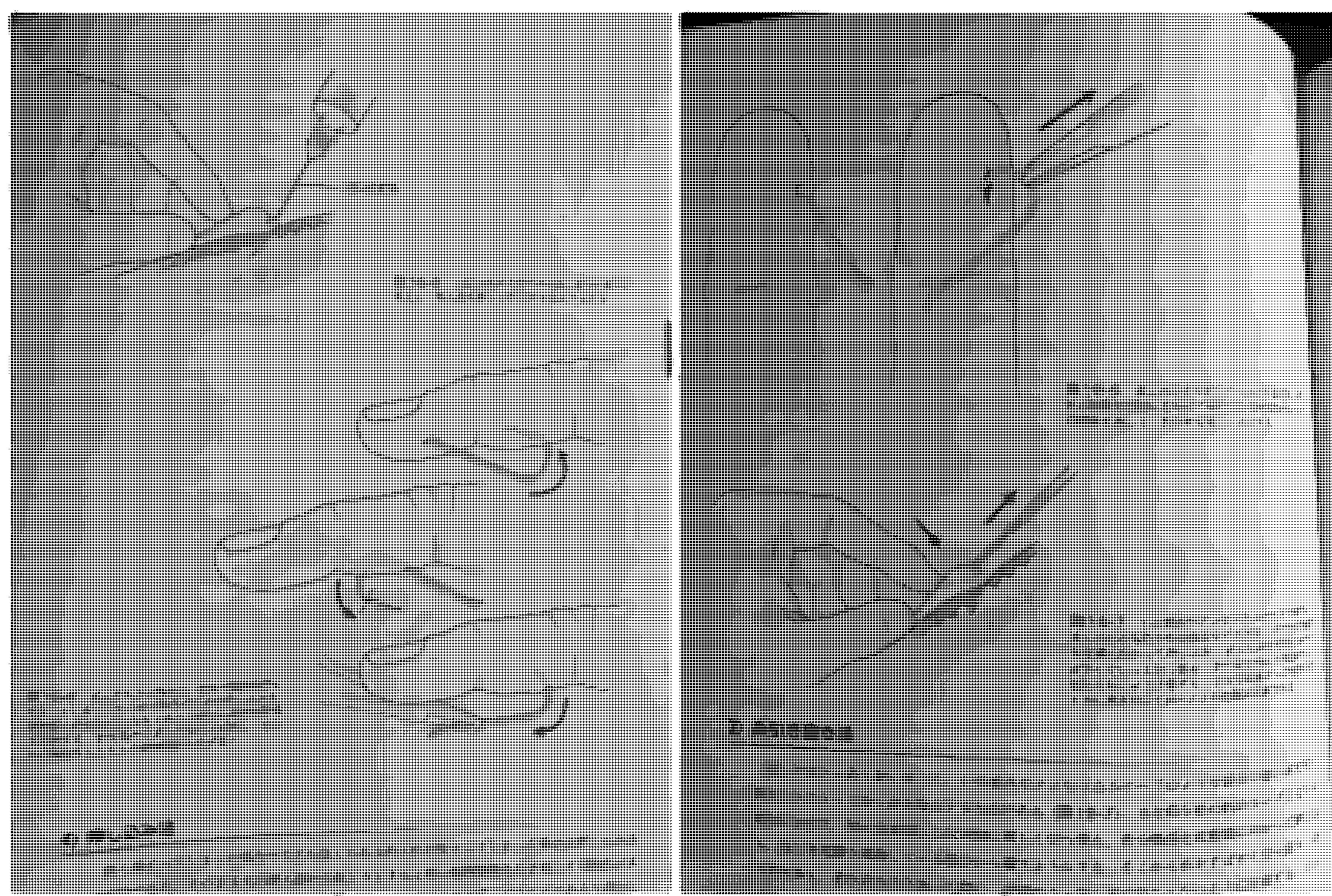
周囲には護衛の人間冒険者數名と、首輪を賣がれ歩かされている痴獣人（コロネ）。
コロネは粗末な服に髪だらけの恰好で、転んでしまい、馬車の運行が止まる。

冒険者（クレーン）「おい、しっかり歩けよ、このグズー」
首輪を賣がれたまま困つん邊いの状態のコロネを蹴飛ばす冒険者。
地面に転がされ、もがくコロネ。

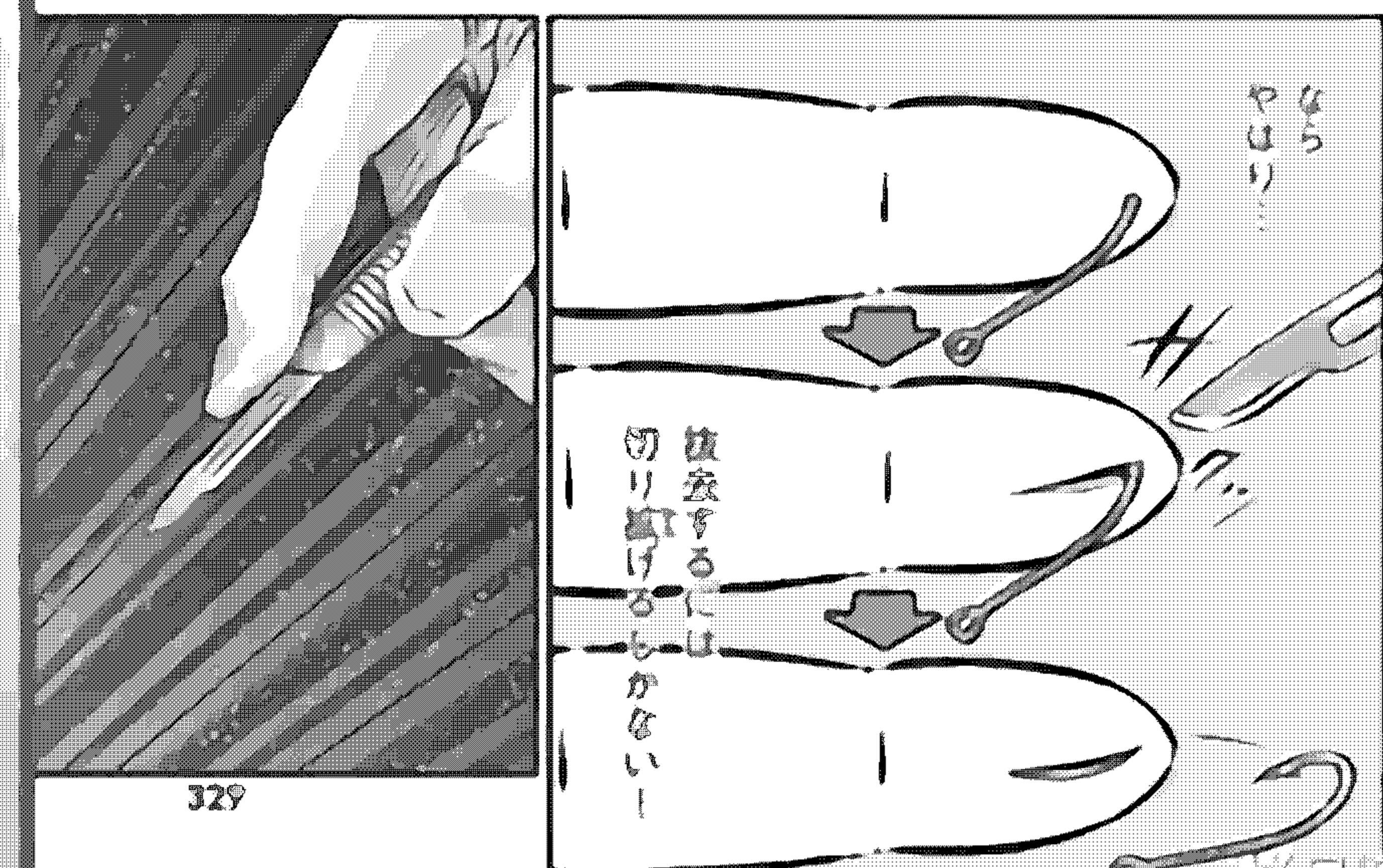
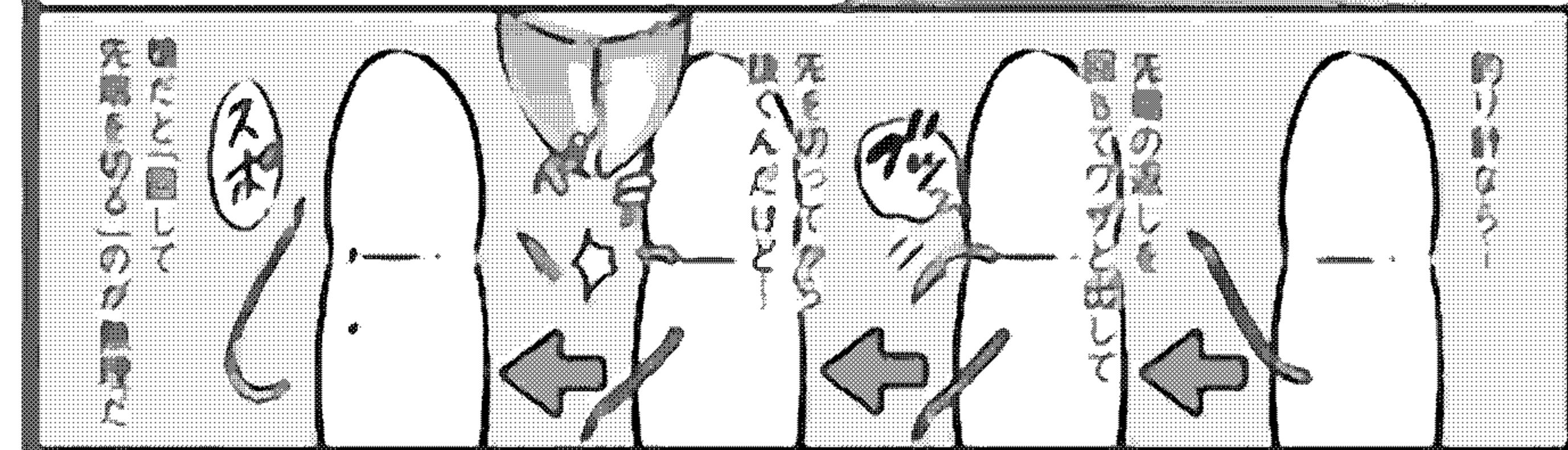
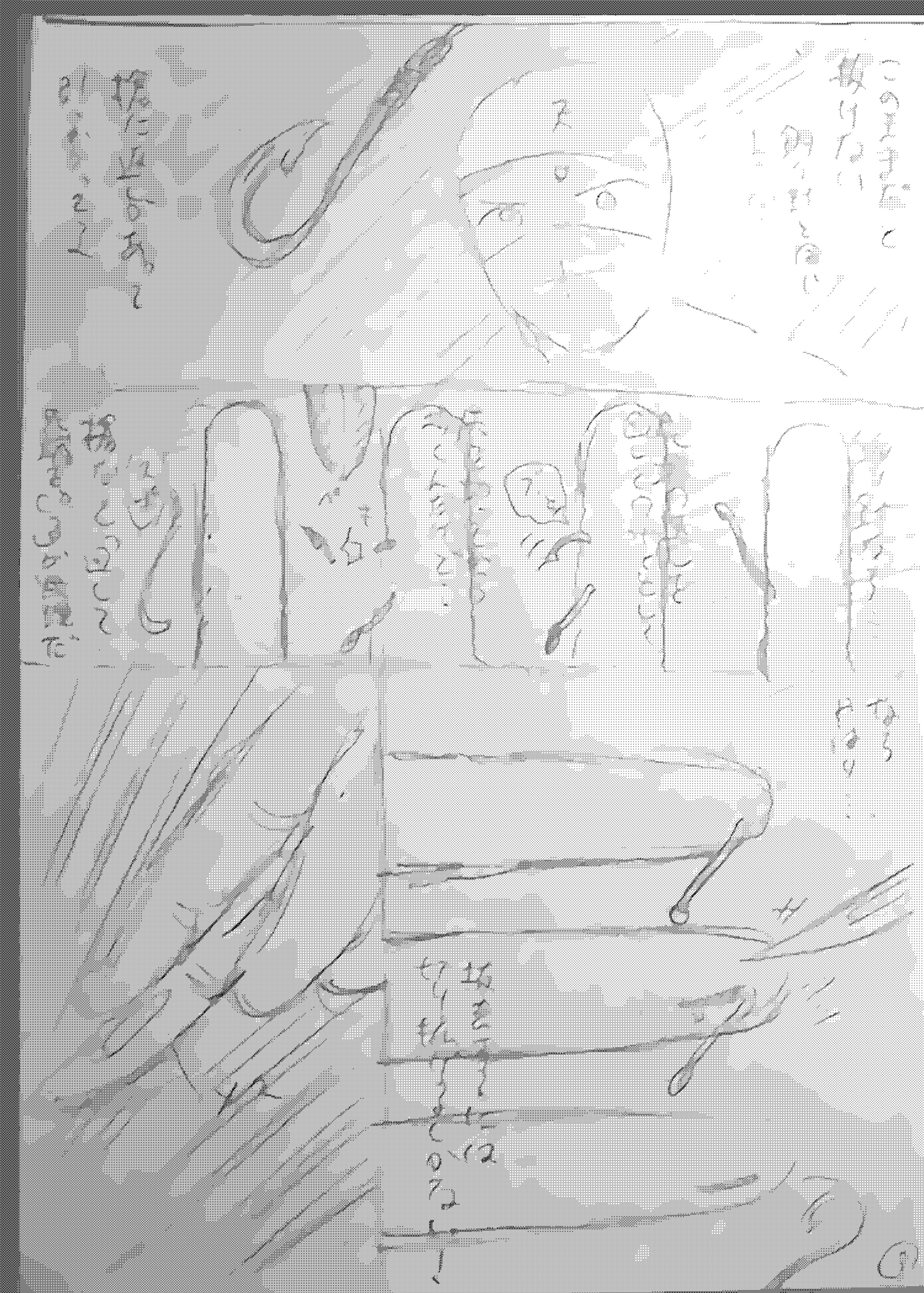
奴隸商人「あやあや、困りますねクレーンさん」
奴隸商人「治療魔法師に附からせると完全に赤字です。ゴミとはい聞
きなのです。もう少し大事にして貰えませんか」
クレーン「ですが旦那、こんな貧相な獣人が売れますかね？」
奴隸商人「奴隸として売れなくとも、眉先一本豊の毛一本にいたるまで
使いみちはあるものですよ」
奴隸商人「それにそのゴミをいくらで仕入れたと思つてらっしゃるので
すか？」



天罰「そうだね。回り針なら皮膚側に先端を回して抜くこともできるけど、膚だとの感しが付いている部分を切らないと突起物は抜けないから」



(もし可能なら回り針の一種類の抜き方を図示されれば、また作画による教われば書籍がPDFにて一冊となる通りします。)



天海「キミ、キミ、大丈夫かい？」

荒い息だけ繰り返す魔獣人。

天海「変わった事……いや、その前にこの荒な呼吸は……ん？」

キマイラ「グオオオー！」

運営を上げながら、森の中から姿を現すキマイラ。

思わず後ずさりかけ、スマホを取り出すも■外の表示。

天海「■外……ここは本当にどこなんだ」

天海「相手だつたら死んだふりするところかもしれないけど……仕方ない」

意識を失った女の子を抱えたまま、慌てて駆け出す天海。

しかし女の子の重みもあり、駆け出すもすぐに思わず転んでしまう。

すると、偶然キマイラの突進を躊躇してしまった天海。

キマイラは林の中に突っ込み。

その勢いで倒される木々を見て、顔を青ざめる天海。

キマイラは向きを変え、今度はゆっくりと少しずつ迫ってくる。

天海「はあはあ……あつたな……どうせ死ぬなら■病院でも飲んでおきたかっただけど、どうやらそんな暇はない……か」

地面に腰を落としたようにうずくまる天海だが、女の子だけは敢あうと彼女に腹いせを見る。しかしキマイラ襲ってこない。

恐る恐る覗き込むと、スライムが彼らの前に立ちはだかっていた。

天海「キミ……」

スライムとキマイラは互いを見つめ合い一歩も動かない。

結果、キマイラはしぶしぶ黙認、スライムはゆっくりと振り返り天海

と向き直る。

天海「……助けてくれたのかい？　■外と隕儀なんだね」

天海「つて、キミ、キミ、大丈夫かい？」

『もううとしたコロネに意識を移すと、全身に発熱が出て苦しそう呼吸を繰り返している。』

天海「この子が何者かはわからないけど、この発熱はアレルギー？　でも……」

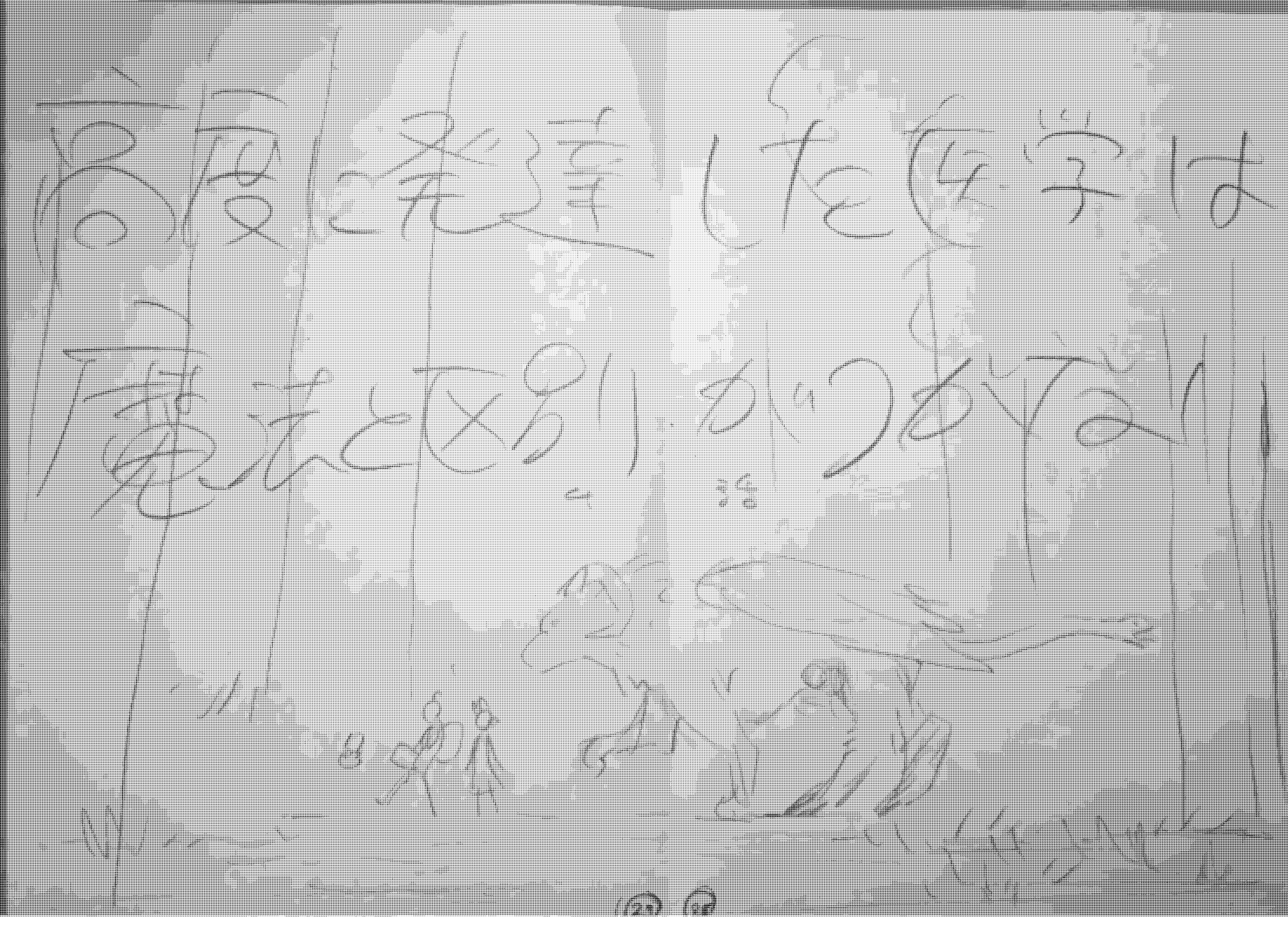
スライムが天海の服の裾を引っ張り、先導するように動き出す。

天海「着いてこいつて言つてるのかい？　でも確かにここだと、さつき



いや
その前に

荒な呼吸を
している!!





第一話

決定稿

高度に発達した医学は
魔法と区別がつかない

NOT FOR SALE